

Access

第 44 号

2018年(平成30年)3月1日

英語の楽しさ

黒部市教育委員会 教育部長 長田 行正

私は、学生時代、英語が得意ではなかった。いや、大学受験の時には、英語にたいへん苦労させられた。しかし、こんな私でもこれまでの人生で何度か英語に助けられたことがある。

一つは、20歳代の頃にアメリカ・ロサンゼルスを訪れた時、病院に行く必要があり、カタコトの英語が大変役立った。わずかな単語が米国の人との意思疎通に役立った。本場の英語の発音は、たいへん美しく感じたことを、今も覚えている。

もう一つは、ALTとの会話である。まだ自分が若く市教委の所属であった頃、AET（アシスタント・イングリッシュ・ティーチャー：現在のALT）の制度が始まり、最初のAETとして、トーマス・ケラムという青年が黒部市に着任した。日本語が話せない外国青年と、英語がへたな日本人担当者がお互い苦労しながらAETの制度をスタートさせた。彼には、大変ご苦労をおかけしたところなのだが、彼が言った忘れられない言葉がある。「日本人と本当に仲よくなるためには、日本語を話せることが一番大事だ」という言葉だ。彼は日本に在る間に、かなりの日本語を習得した。黒部市に在られた次のAETは、マーシャル・ジェームスという青年だった。彼も日本語は話せなかったのだが、あるとき、1日の間、私と二人きりで過ごさなければならぬことになってしまった。そこで、富山市まで一緒に映画を見に行こうと誘った。富山市までの道中や昼食の時、わずかばかりの知っている英語の単語だけがふたりの意思疎通の手段だったが、一緒にいると少しずつお互いの話が通じるようになるのは、大学受験の英語の勉強の賜物であり、勉

強と違って楽しいものがあつたことを今も覚えている。ひどいブローケンイングリッシュでも少しは役に立つものだと思つたものだ。

ブローケンイングリッシュといへば、今年、黒部市の姉妹都市のメーコンビブ郡からお客さんが来られ、6日間一緒に夕食会を伴にさせていただく機会があつた。通訳の方もおられ、初日はあいさつから始まり、私のへたな挨拶も聞いていただき楽しく過ごすことができた。2日目の会食も私のブローケンイングリッシュも少しは通じて、楽しく過ごせたと思う。しかし、である。3日目ともなると、なんだか話題も減り、相手の疲れもあり、私のブローケンイングリッシュでは話が續かない。通訳を介しての会話も硬い感じになってしまう。やはり、もう少し丁寧な英語、考え方を話せる英語を使えなくては話も續かないし、相手に対して失礼だと感じるようになった。そう、「外国の人と本当に仲よくなるためには、外国語を話せることが大事だ」ということだ。もちろんブローケンイングリッシュやスマホの活用も、必要な事を相手に伝えるだけなら有効だとは思ふけれど、決して楽しい会話にはならないのだと感じた。

次に外国からの来訪者と会うときには、少しでも会話を楽しめるよう努力していきたいと思うが、何よりこれからの若い世代が、我々の世代よりも英語を話せるようになることは重要だと思う。

現在、黒部市で進めている黒部国際化教育をこれからも充実し、英語を楽しめる黒部市民が増えるよう市として取り組んでいく必要がある。



【国際理解教育・英会話科公開研修会】

中央小学校 松嶋 隆徳

昨年10月27日に国際理解教育・英会話科公開研修会が中央小学校で開かれました。「国際理解教育・英会話科教育」を糸口にして、コミュニケーション能力や表現力を身に付け、主体的な学びに向かう子供の姿を求めて研究を進めてきた成果を公開することができました。

4年生の道徳では、「バングラデシュから来たシャボン君」の資料を用いて、「愛国心・国際理解」について考えました。手で食べるというバングラデシュのカレーの食べ方について、「自分たちとは違っているからといって、すぐに変だと決めつけるのはおかしい」と感じた主人公の気持ちを考えた上で、手で食べることをどう思うか話し合いました。世界にはいろいろな文化があり、食べ方があることに気付くことができました。そして、外国の文化に関心をもち、自国と異なる文化を理解することにつながりました。

6年生の英会話科では、「Welcome to Kurobe City」をテーマに、国語科の「ようこそ、私たちの町へ」の学習と関連させ、ALTや友達に黒部市のことを紹介する活動を行いました。どのグループも、調べて自分たちが感じた黒部市の魅力について英語で伝えることができました。参観していた市内のALTやJATからの突然の質問に対しても、言葉を選び、既習の表現をフルに活用し、答えていました。目の前の外国人に伝えるという必要感が、自ら深く考え、課題を解決しようとする姿になりました。

これら2つの授業での、外国の文化に進んで触れ合おうとする姿、目的意識をもってコミュニケーションをはかろうとする姿に子供たちの成長を感じました。



【姉妹都市交流 メーコン・ビブ郡の生徒を受け入れ】

『ホストファミリーとなって』

宇奈月小学校 千田 一裕

昨年息子がホームステイした家庭から、その長男が来市することになり、家族みんなで喜びました。今度は、息子がしてもらったようにいろいろな体験をさせたいと考え、メールでやり取りをして受け入れの準備をしました。

私が、「Do you like ~?」「Do you know ~?」と英会話科のような英語で会話をするのを見て、気楽に話すようになっていきました。生地漁港での釣りや卓球などをして、「Nice!」「Good!」「じょうず!」と声をかけたり写真を撮ったりして次第に打ち解けていきました。留学生3人と近所の小中学生としたカレーパーティーでは、「My name is ~. I like ~.」と自己紹介をして、会食とゲームを楽しみました。

駅で見送るとき、息子を送り出すような気持ちになりました。



『またホストファミリーをしたい』

RIMA と KRUPA のママ

娘がホームステイから帰ってきた日から、リマに会うのを楽しみにしていました。1年が経ち、リマの友達のクルパも受け入れることになり、二人の女の子のホストファミリーになりました。初めてで不安でしたが、充実した4日間でした。彼女たちが、リラックスして過ごしてくれることと興味をもってくれている日本の文化に触れてくれることを大切に普段通りに接しました。我が家は高校生の娘以外はあまり英語がしゃべれません。知っている単語にYesやNoと笑顔、身振り手振りをつけて、どうにかやりとりをしました。言葉は通じていなかったかもしれないけれど、心は通じていたような気がしました。二人の笑顔を見ていると、またホストファミリーをしてもいいと思えるようになりました。貴重な経験をさせていただいたことに感謝します。

思い出の中から二つのことを紹介します。

一つ目は休日に金沢へ出かけたことです。兼六園や金沢城、金沢駅を案内しました。歴史を感じる金沢城が印象的だったようで喜んでくれました。また、鼓門の金沢駅前の文字が出る噴水を気に入り、「Welcome」が出てくるまで嬉しそうにカメラを構えていました。

二つ目はベジタリアンの二人の食事のことです。シリアルとミルクが主だったので、新鮮な野菜と旬の果物で楽しい食事になるようにしました。ベジタリアン用のピザを準備した日は目を丸くして喜び、もりもり食べて「ゴチソウサマデシタ」と言ってくれました。



風 作 り の 活 用

— 海外で暮らす子供たちに —

黒部市帰国児童生徒教育研究会理事
YKK 黒部教育相談室長
福 田 豊

1 はじめに

平成28年11月に「黒部市帰国児童等保護者会」で“親子活動—作って遊ぼう”を開催しました。4種類のおもちゃ作りの中の一つに、「凧づくり」がありました。その同じ凧づくりが1年後に、ジャカルタ日本人学校2年生の親子活動に活用されました。その経緯を今回、紹介します。

2 “親子活動 作って遊ぼう”の様子

11月26日(土)に、黒部市帰国児童の保護者6人と、児童8人の参加で親子活動が行われました。おもちゃ作りには、凧作り、ヤクルト容器でサンタとトナカイ作り、ウッドスプーンで作る人形や動物などがありました。一番人気があったのが「インバーダー凧作り」でした。凧を作ったあと、渡り廊下を使って凧揚げをしました。ゆっくり走っても、落ちないで凧が揚がっているの、子供たちは歓声をあげ喜んで体を動かしていました。



3 ジャカルタでの海外巡回教育相談

平成28年12月に海外巡回教育相談でジャカルタを訪問しました。そこでは12家族の教育相談を行いました。その中で、幼児や小学校の低学年をもつ保護者の方が子供の体力不足を特に心配しておられました。

ジャカルタ市内では、交通渋滞と歩道が少なく道路状態が悪く近くの公園に子供たちが遊びに行くことができないことも、体力不足の原因になっているようでした。

海外巡回教育相談が終わり、相談室にもどった時に「黒部市帰国児童等保護者会」“親子活動—作って遊ぼう”で、せまい場所で楽しみながら凧を揚げ、体を動かしていた子供たちを思い出しました。そこで、ジャカルタでの海外巡回教育相談をした小さいお子さんのいる5家族に、「凧作りセット」を送りました。親子で凧の作り方の説明書を見ながら作ってもらい、親子の絆を深めるとともに子供の体力増強を願いました。

4 ジャカルタ日本人学校の親子活動

平成28年12月にジャカルタでの海外巡回教育相談をした保護者から、富山県の小学校に体験入学の依頼のメールが平成30年1月に、届きました。その中に、凧を送ってもらった礼状の手紙がありました。

次に、「礼状の手紙」を紹介します。

『お世話になっています。』

昨年の11月22日にジャカルタ日本人学校2学年の親子活動が行われました。私は今年PTAの仕事をしており、企画や準備のお手伝いをしていました。凧は、インドネシアでも娯楽として親しまれていることから共通の文化として凧作りを行いました。色々な凧の素材、形を変えて試作しましたが、福田先生に送ってもらった凧を超える凧は作れず、先生の凧を見本とさせていただくこととなりました。



ジャカルタで凧の部分の素材、竹ひごを探すのは困難でしたがなんとか先生の凧に近いものが出来上がりました。タコ糸はプラスチック製の凧糸が主流でそちらを使いました。



学校での先生方、保護者からの評判も大変よく、そして子供達の喜んで走り回る様子を見ることが出来たことが何よりも嬉しかったです。

これも福田先生に教えて頂いたお陰です。本当にありがとうございました。』

5 おわりに

海外巡回教育相談後に送った凧が、家庭で使われているかどうか知りたいと思っていたところに、相談のメールに凧のお礼が届きびっくりしました。「黒部市帰国児童等保護者会」での親子活動の凧作りが、海外の日本人学校の親子活動に活用されたことにうれしく感じました。

「ドイツからの編入生」

5月にドイツの現地校から編入学してきた児童がいます。先日、国語科で見事に発表を終えたので、担任が「5月に来て、間もないけれど…」と褒めようとした瞬間、学級の児童から「え！そうだった？もっと前じゃなかった？」という声。そうなのです。3年生にすっかりなじんでいる彼女は、まるでずっと一緒にいた仲間ようです。分からない言葉はすぐに尋ねたり、自分で調べたりとよく学びます。給食も楽しみにしていてそれはおいしそうに食べます。休み時間には笑い合ったり時にけんかをしたりしながらドッジボールを楽しんでいます。どんなことにも興味・関心があり、意欲的なのです。2学期には、学級代表に立候補し、多数の子供たちの中から選ばれました。「学級代表をすれば、きっと、もっと学校のことが分かるよ。」とアドバイスする子供たち。彼女が生き生きと輪の中に入って活動していく姿は、学級の子供たちに大きな刺激を与えています。何にでも挑戦する気持ち、努力を惜しまない気持ち、相手を思いやる気持ち。

これから世界へ羽ばたいていく子供たちです。国を越えて活躍するとき、彼女の姿を思い出して、勇気をもってその一歩を踏み出してほしいと願っています。

(黒部市立中央小学校教諭 澤田 季香)



「ALTに思うこと」



我が校の「生きた国際理解教育」ALTヘンリー・プロサクⅢを紹介します。昨年四月に黒部市勤務となった彼は、とにかく明るく、人好きのする性格です。

彼独自の取組に、毎週水曜日昼の校内放送“Very Cool English Radio”があります。十分程度の放送ですが、話す内容は、週末の過ごし方や旅行の思い出、時事問題、アメリカの行事の紹介など多岐にわたります。英語に興味のある生徒には「勉強になる」と、とても好評です。

彼には、「相手のことを個人的に知りたい」という基本姿勢があるようです。相手を知り、その人と仲良くなりたいと思う気持ち、詰まるところ、相互理解です。国際理解教育は「人と人のつながりをつくること」であると彼から教わった気がします。英語はそのための道具であり、英語教育は「心の教育」でありたいと思うのです。



(黒部市立宇奈月中学校教諭 村椿 勝)



第2回保護者会

12/9(土)保護者 14 名、子供 18 名参加
今年は牛乳パックでアーチェリーを作りました。ストローの矢的的に当てて楽しみました。その後、子供たちは空き缶つみや空き缶釣り、わりばしダーツなどで遊び、保護者は別室で母国語や滞在国の言葉を気兼ねなく使えるような環境づくりについてなどを話し合いました。



黒部市帰国児童生徒教育研究会

会長 寶田 順一

(黒部市立中央小学校長)

事務局 黒部市教育センター

〒938-0861

黒部市宇奈月町下立 2361

TEL 0765-65-0029

FAX 0765-65-2008

e-mail kurobe-ec@tym.ed.jp

HP <http://www.kurobe-c.tym.ed.jp/>



◆編集後記◆

今号では YKK 教育相談室の協力を得てジャカルタ日本人学校での活動の様子を掲載しました。ご協力ありがとうございました。